

14.5

14.5-76



6

東京府史蹟名勝天然紀念物調査報告 第十三冊

東京府編

「名勝堀切小高園の花菖蒲」



始





東京府史蹟名勝天然紀念物調査報告 第十二册

4.5-76



昭和十年三月



東京府史蹟名勝天然紀念物調査報告

「名勝 堀切小高園の花菖蒲」

第十二册



發行所寄贈本

東京府



14.5-76

## 序言

史蹟名勝天然紀念物の調査保存は國民性の涵養上最も重要なり。特に我國の如き光輝ある歴史を有し、天然の恩恵に富める國民は其の歴史を物語る史蹟遺物と天恵に頼れる名勝天然紀念物との保存によりて精神修養に資すべきもの尠からず、抑歴史は祖先の文化生活の記録にして、史蹟は其の文化活動の舞臺なり。是を保存し愛護することにより祖先の文化を理解し、愛國の精神を作興すべきものなり。

本府は武藏國の大半を治し、關東平野の中央に在り山川平野相半ばして、明治維新以來我國の首都として人烟日に激増し、街巷益擴張し、近代都市の發達に伴うて却つて其の舊時の佛を失ひつゝあることは誠に遺憾の極みなり。

本府は曩に史蹟名勝天然紀念物保存法により名勝として指定せられたる堀切小高園の花菖蒲の調査を理學博士三好學氏に委嘱し、其の結果を報告し史蹟



名勝保存の主旨を普及し、併せて國民思想善導の一助たらしめんと欲す。

二

昭和十年三月

東京府

堀切小高園は江戸時代より今日に存在する花菖蒲園にして、園の景趣の概ね舊態を保つこと又培養の品種が古來の名花に屬することに於て著し。本報告は小高園の花菖蒲培養の由來と其主なる品種に關して述べたるものなり。

昭和十年二月十日

三好學

一



東京府史蹟名勝天然紀念物調査報告 第十二冊

目次

一	花菖蒲及類似植物	一頁
二	野生花菖蒲に於ける變異性	二
三	松平菖翁の花菖蒲培養の由來	三
四	花菖蒲園としての堀切小高園	七
五	小高園の主なる花菖蒲の品種	一〇
	(一) 三瓣單色花	一一
	伊達道其	一一
	雛祭	一一
	秀紫	一二
	大淀	一二
	若紫	一二



鳳 雛 ..... 二  
 江戸自慢 ..... 二  
 免の色 ..... 二  
 大江戸 ..... 二  
 富士の雪 ..... 二  
 御幸傘 ..... 三  
 和歌の浦 ..... 三  
 初霜 ..... 三  
 座間の森 ..... 三  
 (二) 三瓣紋 ..... 三  
 猿 踊 ..... 三  
 岩戸の光 ..... 三  
 萩の里 ..... 三  
 迦陵嚩伽 ..... 四  
 紫衣の雪 ..... 四

虹の巴 ..... 四  
 瑞雨の光 ..... 四  
 野戦の櫻 ..... 四  
 入日の灘 ..... 四  
 蜀江錦 ..... 四  
 鶴鵲樓 ..... 四  
 大鳴海 ..... 五  
 四海波 ..... 五  
 青龍刀 ..... 五  
 都鳥 ..... 五  
 千代鶴 ..... 五  
 七福神 ..... 五  
 色自慢 ..... 五  
 (三) 三瓣縁取 ..... 五  
 立田川 ..... 五



由縁の霜

四

蓬萊宮

一六

大鳥毛

一六

(四) 三瓣染分

岩井城

一六

君が恵

一六

千歳鶴

一六

青海波

一七

(五) 六瓣單色花

劍の舞

一七

獅子怒

一七

熊奮迅

一七

古稀の色

一七

霜夜の月

一七

王昭君

一七

黒雲

一七

萬代の波

一八

(六) 六瓣紋

霓裳羽衣

一八

紅葉の瀧

一八

茶臺

一八

泉川

一八

神代の昔

一八

眞鶴

一八

長生殿

一九

餘吾の湖

一九

七寶

一九

蝦夷錦

一九

七小町

一九

明石湯

一九

五



浪乗船

五節の舞

三光紫

花錦

由縁の色

花御所

吹寄

花葵

寶遊

滋賀の浦波

照田

春日野

天の川

湖水の色

(七) 狂 咲

酒中花

藤娘

利勝の玉

宇宙

笑布袋

萬里婦

紫雲の瀧

鳳臺

連城壁

唐織錦

獅子踊

(八) 稀 咲

黒龍

龍の爪(閉花のもの)

龍の爪(半開のもの)



龍の玉	二二
玉寶蓮	二三
蓮香城	二三
八重勝見	二三
銀玉	二三
折鶴	二四
十二一重(四瓣花)	二四
十二一重(五瓣花)	二四
赤寶冠	二四
賀茂川	二四
葵車	二四
田毎の月	二五
天女の冠	二五
六文獻	二五

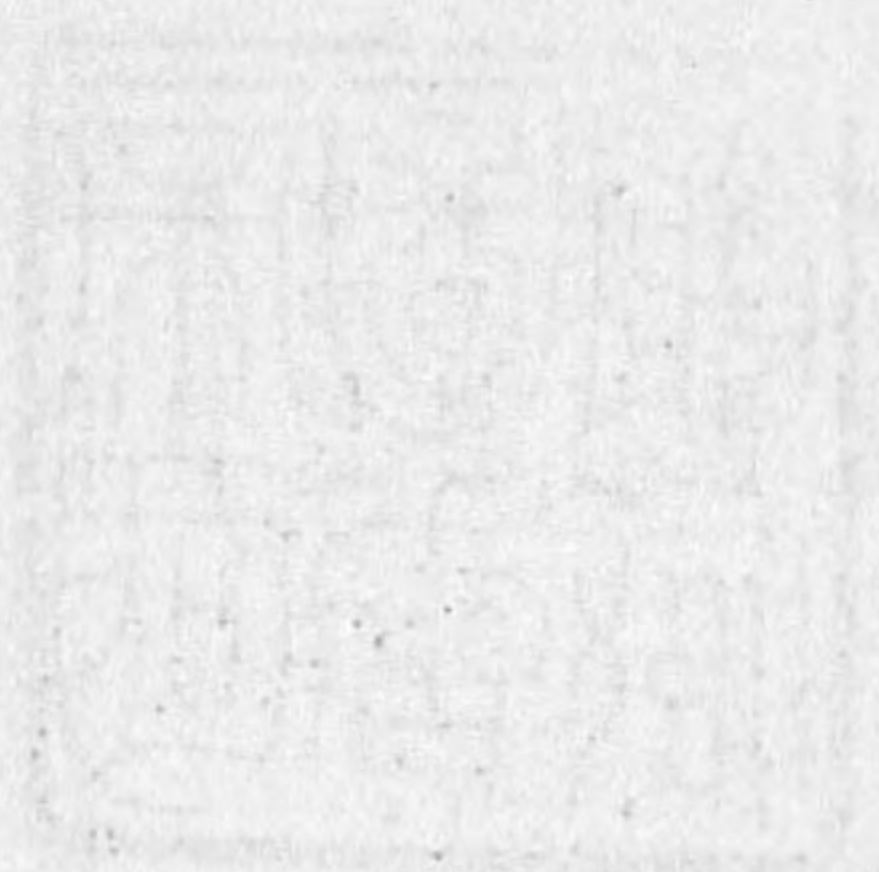
圖版目次

名勝小高園見取圖

第一圖版	江戸時代に於ける小高園の所在 松平左金吾邸の所在
第二圖版	堀切小高園の花菖蒲(一)
第三圖版	同上 (二)
第四圖版	同上 (三)
第五圖版	廣重の浮世繪に現はれたる小高園
第六圖版	尾張大納言齊莊筆小高園の花菖蒲に関する書畫
第七圖版	松平菖翁の墓
第八圖版	野生花菖蒲
第九圖版	笑布袋
第十圖版	大淀 加茂川 千代鶴 座間の森
第十一圖版	劍の舞 霓裳羽衣 花錦 紅葉の瀧
第十二圖版	七小町 滋賀の浦波 葵車 黒雲
第十三圖版	湖水の色 七寶 眞鶴 泉川



第十四圖版 十二一重(四瓣花) 十二一重(五瓣花)  
第十五圖版 龍の玉 龍の爪 玉寶蓮



# 東京府史蹟名勝天然紀念物調査報告 第十二册

「名勝 堀切小高園の花菖蒲」

M. Miyoshi, Hamashobu of the Kotakaen, the oldest Iris Garden at Horikiri

東京府囑託 理學博士 三 好 學



## 一 花菖蒲及類似植物

鳶尾科植物にして我國の山野に生じ、赤紫色又は紫色の花を開き美麗なるものには花菖蒲 (*Iris ensata* Thunb. syn. *Iris Kaempferi* Sieb.) の外にかきつばた (*Iris laevigata* Fisch et Mey.)・あやめ (*Iris sanguinea* Donn.)・ひあぶらあやめ (*Iris setosa* Thunb.)・えひめあやめ (*Iris Rossii* Bak.) あり。此中古來觀賞の爲培養せられたるものは前の三者なり。

後の二者は其産地が深山なるか又は特に或る地方にのみ限られたるにより人の知るもの少し。

かきつばたは古來燕子花と呼び、徳川幕府の初期に於ても多く培養せられ、庭園の池邊には普通此花を見たり。花色も紫色の外淡紫・白等に及び、花形も亦種々に變化せり。是等の品種は舊時に成れる燕子花圖譜の類に載せられたるが、今日にては此花草の流行廢れたるにより品種の數も甚少くなれり。



あやめは溪蓀と稱し、かきつばたと反して普通の土壤に發生するにより、舊時にありては花壇に多く植ゑられ、隨て園藝品種も頗る多かりしが、是亦培養の廢れたると共に古來の品種を見難きに至れり。

花菖蒲の培養も亦頗る古く、延寶元祿頃の園藝書には種々の品種の記載せられたるものあり。降て天保嘉永頃には其培養流行し多數の品種を生ぜるが、近世に至り培養の稍、廢れたるの觀あり。然れども現時尙古來の品種の保存されたるもの少からず、加ふるに年々新花の發生により能く觀賞的價値の維持せらるゝを見る。

## 二 花菖蒲に於ける變異性

花菖蒲は東北地方より西南地方に至るまで山中又は低地の濕原に生じ、往々大群落を形成す。かきつばたの如く絶對水生植物に非ざるを以て、比較的乾燥せる土壤にも發生するを得。例へば日光赤沼原又は別府温泉の背後にある由布岳の山原の如き、現に濕原ならざる處に於ても此植物の盛なる群落あるを見る。然れども岩手縣花巻地方に於ける如く水分を以て飽和されたる濕原に生じ、又同縣西宮野目地方の如く直ちに沼中に發生せるものあるによりても、同植物が元來水生植物に屬するを知るべし。唯其乾燥に對する適應性大なるにより、一旦濕原が普通の草原と化するも尙生存を續け、群落を維持すること現に日光赤沼原に於けるが如し。

野生状態に於ける花菖蒲は莖の高さ約六五—七〇仙米、外花蓋長さ約八・五—七仙米、幅約三・五仙米、内花蓋長さ約三・五仙米、幅約〇・七仙米、蒴圓形長さ約三仙米、幅約一・七仙米、種子略、半月形、長さ約〇・七仙米なり。

一の花菖蒲群落に於ける莖の高さ、花の大きさ等の如き、個體間の差異は著しからざるも、花色の變異は著しきものあり。予が従來主として本邦中部より北部に亘れる花菖蒲群落に就て檢せる所にては赤紫色の花を着くるもの普通なるが（第八圖版）、稀には純紫色の花を着け（第八圖版）、又赤紫色・紫色等の色の淡きものあり（第八圖版）。斯かる色觀の變異は群落によつて定まれるものにして、此點に關し予は花菖蒲の群落を三種に區別せり。即其一是赤紫花菖蒲群落、其二是紫花菖蒲群落、其三是混色花菖蒲群落なり。茲に言ふ混色とは種々の色の斑入となれるには非ずして花により色彩の異なるを云ふ。次に野生花菖蒲の花形は殆皆三片の外花蓋の著大となれるもの即ち三瓣花なるも、稀には三片の内花蓋が同様に著大となり、所謂六瓣花を成するものあり。又時としては花の部分が四の數と成り、彼の培養花菖蒲の「十二一重」の如くなれるものあり。是れ皆予の觀察せる實例にして、一見何等の變異を呈せざるが如き花菖蒲群落に於ても個體間には往々前記の如き著しき畸態の出現せるを認むることあり。

## 三 松平菖翁の花菖蒲培養の由來

花菖蒲は前に述べたる如く徳川幕府の初期に於て已に園藝植物として知られたるが、而かも此花草が盛に培養されたるは天保以降にして、其多數の品種の生成は一に松平左金吾の努力による。左金吾は幕府の旗本にして、名は定朝、伊勢守と稱し、知行二千石、江戸麻布櫻田下町に住し（嘉永四年の「江戸切圖」麻布の部に松平左金吾の邸を表せり。第一圖版參照）、性園藝を好み、特に花菖蒲を愛し、其培養に努め、菖翁と號せり。安永二年に生れ、文政の初西丸御目附より京都禁裏附となり、次で京都町奉行となり、天保年間まで在京十餘年に及べり。同年間小普請組支配に轉じ、江戸に歸り、後職を辭して隱退し、専ら園藝に親み、安政三年江戸に歿せり、享年八十四、墓は品川東海禪寺にあり。

東海禪寺の菖翁の墓は三共製藥株式會社工場の裏丘上にあり。大正十五年四月五日予は東京府囑託稻村坦元氏並に東京市囑託矢吹活禪氏と共に始めて同寺に到りて調査し、次で本年二月二十一日東京府囑託矢口貢氏と再び調査せるに、墓碑



の高さ二尺五寸、礎石高さ一尺四寸、梅鉢の紋あり。碑面に泰岳院殿前勢州刺史松翁宗朝大居士と刻し、向つて左に「安政三丙辰年」、左に「七月八日」と刻せり（第七圖版）。右墓碑の一角に尙松平家代々の墓碑約十四基あり。

「菖翁」の號に關しては「花菖蒲花銘」の末に「安政三丙辰年八月改松平菖翁より借用寫之 樂松館」とあり。尙「菖花譜」には「右菖翁松君家園奇種」と記し、又左金吾門人吉田潤之助所藏「花菖蒲培養録」の奥書に「右一冊者去年松平菖翁君八十爲予手寫一本所贈也以永傳於家云」（下文上妻博之氏報知の條參照）と記せるによりて見るも當時斯く呼ばれたるは明なるが、同人著「百花培養考」（明治二十九年博文館發兌「日用百科全書」一二頁の上欄）の自序に「弘化三丙午年孟春菖翁誌す」とあるにより「菖翁」の號は左金吾自ら用ひたるは疑なし。

「左金吾」は菖翁の通稱、定朝は名にして、松平家にては代々「定」字を用ひたり。前記青松寺の墓碑の戒名中「松翁」は「菖翁」、又「宗朝」は「定朝」に因みて撰みたるものならんか。

菖翁の花菖蒲培養の顛末は其著「花菖蒲培養録」に詳なり。此書の全文は「東京市稿遊園篇」第三（昭和四年發行）第九七五頁以下に載せたり。同書に記せる如く右の書の寫本として世に傳はれるものには嘉永の自序あるもの、同二年の自序ありて七十七翁と署せるもの、同五年の自序又同六年の自序あるものもあり、予の檢せるものは六年本（帝國圖書館藏本）と元年本（堀切小高園藏）なるが、兩書中文字句の出入又誤寫あり。（二年本に菖翁齡七十七、下記の五年本には八十、又上記の六年本には八十一とあるにより、菖翁の出生は前述の如く安永二年となる）。

熊本市上妻博之氏よりの報知によれば、同地に傳はれる「花菖蒲培養録」の自序の後には「嘉永五壬子とし仲夏 八十翁定朝」とあり。又上妻氏所藏の同書は菖翁門人吉田潤之助藏本の複寫にして、嘉永五年菖翁より其の手寫の一本を贈られたる由吉田氏の奥書あり。故に吉田家本は右の書の原本と云ふべく、美濃紙一行二十字詰二十四行に認め、序文一枚、

花菖蒲培養の由來七枚半、花形（二十一圖）五枚半、葉表裏圖及贊歌三首一枚、培養法五枚、總計二十枚なり（上記報知に對し茲に上妻氏の好意を謝す）。

前記の六年本に就て閱せるに、自序（一枚半）の次に花菖蒲培養の顛末を記せる一章（十一枚）あり。之によれば菖翁の父（名は定寛、通稱左金吾）は天明年間信州産の花あやめを得て培養せるが、實生の變化なきにより栽培を廢せり。後伊豫松山より陸奥安積沼の花勝美（培養録）には花且美とあり）の實なりとて送り來れるものを蒔き、三代・四代と世代を重ねるに従ひ、花の色并に形の變化著しくなれり。此花草は水生なるも普通の土壤に能く生長し、纔に水を湛へて培養せり。

後文政に至り菖翁は再び奥州安積沼の花勝美を得たり。是れ知人が同地より齎せるものにして、園中にて其實生を作れるに、是れ全く前に記せる花勝美と同種なるを知れり。

菖翁は諸國にて花菖蒲又花勝美と稱するものを得て培養せるに、其形狀は區々たりしが、銳意栽培に従事したる結果後年に至り遂に多數の優れたる花品を生ぜしむるを得たり。

文政より天保に至り菖翁は京都に勤務せるが、其間官舎に於て花菖蒲を培養し、名花を 禁裡へ奉れり。其記事左の如し。

文政の初 長安の守衛に命ぜられ彼地に有事十有餘年官舎の園中に竊に此花を養ひ實生培養なし秀たる花のみ撰みて大君に奉りしに測らずも 歡歡ましまし勾當の内侍へ傳へ申して 歡慮の辱を蒙りたり、是多年花を愛する一得か恐喜するに餘りあり。

次に江戸に歸れる後花菖蒲の培養を遂げたることに關し左の記事あり。



天保の度官轉じて此地へ來し後は杖を握り内に養ふ、齡なれば 公事を辭通世幽隱し心身を百花に忘れつ花菖蒲の一品其昔より連綿として培養なせしことなれば今猶是を親愛し年々歳々生ぜる秀逸なるものを撰み花園に列して老を養ふ一助となせり丹精既に功あつて優品一百餘となりぬ。

菖翁は其丹精によりて作れる自園の花菖蒲が賣品となるを虞れ濫りに人に與へざりしが、享和年間舊友萬年某の懇請によりて分與せり。是れ同園の花菖蒲が始めて世に出づるに至れる経路なるべしと「培養録」に述べたり。其後生成せる花菖蒲の名花は堅く園中に秘せるにより人の知るものなかりしが、天保嘉永の頃此花草盛に流行し、花時は菖翁の園中に來觀するもの其數を知らず、又分與を乞ふもの頻にして謝絶し難く、遂に乞に任せりと云ふ。同園の花菖蒲が多く世に出てたるは蓋し此頃なるべし。

本章の終に於て菖翁が此書を著はせるは知人より花菖翁の培養法を傳へんことを乞はれたるに由ると記し、尙書中に載せたる自畫の花菖蒲が宛然牡丹の如く見え、普通の花菖蒲とは雲泥の差なれば覽る者恠しむべきも、若し疑惑あらば滿開の時園内に來りて證せられたしと述べたり。

菖翁の花菖蒲寫生圖にして本書に載せたるものは左記の二十一品種なり。

雲の峰	木綿手纏	霞の波	晴雪の松	昇龍	雲衣裳	歸雁操
雲龍	仙女の洞	五湖の遊	鳴鑿	虎嘯	六合	東下
管絃の聲	紅粉青娥	龍田川	月下の波	獅子奮迅	霓裳羽衣	宇宙

以上花菖蒲培養の由來の次に培養法（六枚）に移り、自家の経験に基づく培養上の注意を親切に記せり。

花菖蒲の培養によれる品種の生成は菖翁父子以前にも行はれたるは前に記せるが如し。又菖翁の當時に於ても他人の手

によりて作れるものあるべしと雖も、其來歴は概ね分明ならず。獨菖翁は其長命なる生涯を主に花菖蒲の培養に努め、生成せる夥多の品種の中、優秀なるもの約二百に及べり（「花菖蒲花銘」並に「菖花譜」による）。是等の品種の多數が後世に傳はり、現に諸處の花菖蒲園に培養せらるゝは其花名と花容とによりて知るを得べし。

菖翁父子が花菖蒲の花品の生成に供せる原植物と其來歴とは分明ならざれども、野生種と培養品種とを共に用ひたるが如し。野生種中には赤紫色の花普通なるも稀には純紫色のものもあれば、若し斯かる先天的變異を呈せるものを用ひたりとせば、色彩の變化は一層容易なりしや勿論なり。然れども是等の點に關しては「培養録」に記さざれば知るに由なし。

前に記せる菖翁の得たる花勝見は、培養録の記事によれば、花菖蒲に該當するが如きも、元來該植物に就ての古人の考證は甚區々たり。荷田東磨・加茂真淵・狛諸成は何れも之をかたばみとなし、屋代弘賢はまこと考へ、多賀常政はまこと並に類となせるが、藤塚知明は宗仲の説を引き、且圖を附し、淡紫紅、單瓣四出あやめの花に似たりとせり。右の花色及發生地の状態よりすれば花菖蒲なるが如きも、唯四瓣とあるは野生花菖蒲の花の普通三瓣なるに反せり。然れども前に記せる如く（三頁參照）、花菖蒲群落中には稀に四瓣花ある事實に徴すれば、斯かる畸態が昔時に於て偶然人の認むる所となりしことあるべし。要するに安積沼の花勝見は古來の考證一定せざるにもせよ、同地方に花菖蒲の群落ありしは疑なし。

菖翁の花菖蒲の多數の品種は天保嘉永頃には堀切の小高園其他に移れるが、茲に尙菖翁の門人吉田潤之助によりて其郷里たる熊本に傳はれり、其顛末は上妻博之氏の記事にあり（參考書目の項參照）。熊本の花菖蒲は普通の如く水中に作らずして鉢植となすによりて著し。

#### 四 花菖蒲園としての堀切小高園



野生花菖蒲の開花期は本州中部並に北部に於ては概ね七月上旬頃なるが、平地に於ける培養花菖蒲の開花は六月中旬より下旬に至るを常とす。此頃は恰も梅雨の季節にして、陰鬱の空合に於ける花菖蒲の花色と花形とは頗る人意に快なり。是れ此花草が古來觀賞せられたるゆゑにして、花菖蒲園の設けらるゝに至れるも亦之が爲なり。

江戸時代最初の花菖蒲園として現存するものは堀切小高園にして、東京市葛飾區堀切町にあり。京成電車堀切菖蒲驛より南方約數町に過ぎず。小高園の開園の年代は分明ならざれども、汎く人の知る所となれるは廣重の浮世繪に現れたると、又安政年間「江戸切圖」の隅田川の部(初版)に出でたるところ。「小高園由來」によれば堀切は昔より四季の花卉を培養し之を東都に鬻ぐもの多かりしが、享和文化の頃同村の農伊左衛門(安政の切圖に一伊右衛門とあるは誤なり)は特に花菖蒲の培養に苦心し諸方より新花を求め、實生を作り、變化を呈せしめたるが、其子伊左衛門(世襲名)亦父の業を繼ぎ相州より一種の花菖蒲を携へ歸りて自園に植ゑ七福神と名づく。數年の後此花より更に變化せるものを生じ醉美人と稱せり。斯くして次第に牡丹咲・狂咲等の奇花を生ぜるが、當時本所北割下水に住せる旗本萬年某より二三の花菖蒲を得(前文菖翁の花菖蒲培養の由來中、菖翁が享和の頃萬年某に花菖蒲を分與せる記事あり)、後更に松平菖翁より宇宙・寛裳羽衣・立田川・十二重・月下波等の優種を乞受けて培養し、以て繁殖を圖れり。是れ江戸時代に於ける花菖蒲園の嚆矢にして、舊時堀切の花菖蒲と云へるは一に同園の呼稱に外ならず。蓋し此園が隅田川の上流綾瀬の里に近き田野の中にありて景趣に富み、江戸郊外行樂の適地たりしのみならず、濃艶なる花菖蒲は園内に満ち都人士の目を驚かせるにより、頗る著名となるに至れり。是れ天保末年なるが如し。

小高園の花菖蒲満開の景趣は廣重の浮世繪によりて世に知られ、「江戸百景」・「東都三十六景」・「江戸名所四十八景」・「繪本江戸土産」等に載せられたるが、此外に小高園所藏の廣重筆一枚摺の圖あり(第五圖版)。是等の繪には概ね園内の小高

き臺地を現せるが、現存の臺地よりも頗る高く畫がかれたり。同園が小高園と呼ばれたるは明治の初期以來ならんか。

天保の頃より同園の名聲世に傳はると共に大名貴人の訪ふもの少からず、尾張大納言徳川齊昭(金城主人)亦來りて花を賞し「日本一花菖蒲」と書し且花菖蒲の圖を畫き園主に與へたり、現に小高園に藏する所なり(第六圖版)。

小高園は昭和八年二月史蹟名勝天然紀念物保存法により名勝として指定せられたり。指定の説明左の如し。

開園の年代明確ならざるも天保に至りて其名著はる栽植の品種は當時花菖蒲の愛培者松平左金吾の園に出づと言ふ能く古來の品種を傳へり園圃の間曲橋を架して路を通す築山を設けて眺望の臺を造り臺下松樹等を配植して添景とす近く花園を觀遠く郊野を望みて景趣佳なり江戸時代最初の花菖蒲園として存在するところのものなり。

(指定の事由) 名勝の一部(著名なる公園及庭園)、三(花樹、花草、紅葉及鳥獸、魚蟲の名所)による。

現時の小高園(見取圖參照)は古來の位置にあり。指定區域は小高園地内並に隣接地を合せて總計三十筆、五千五百八十九坪に亘り、此内花菖蒲培養園は約千五百坪に及ぶ。門は西南に面し、門内の廣場の右側に住宅あり、左側の東屋ひまに近く一株の根上り松、又其東方に稍、大なる黒松あり。根上り松の左方の小高き臺地に小亭を設け眺望に便にす。臺下には東西に通ずる小流あり。流に架する橋を渡れば前面悉く花菖蒲園にして、水田の如く水を湛え、其中に品種を列植し、各列に花名を記せる札を立つ(第二圖版より第四圖版に至る)。一々の品種の特徴は千狀萬態なるも、而かも能く整列せられて、色彩配合の美を成すのみならず、亦如何に野生花菖蒲の先天的變異性が培養によりて顯著となれるかを示すべし。

園内には小徑を通じ、又八ッ橋を架して花間を逍遙せしむ。園の境界には堀を繞らさず、唯低き垣(竹の四ツ目垣)を設くるに過ぎず。外圍は古來一帶の田野にして、現時も尙稻田となり、附近に目を遮ぎる建物なきを以て、開豁なる風景を成せり。殊に前記の台上の小亭に登れば満開の花菖蒲と水田遠樹の景觀とは一望の中に入り、昔時廣重の筆に成れる圖



面に彷彿たるものあり。

要するに小高園の景趣は一は花菖蒲の培養園が建物の地域と全く別なると、一は田野自然の借景に富めるとにあり。

## 五 小高園の主なる花菖蒲の品種

小高園の花菖蒲の品種は前記の如く菖翁の園中より出でたるものと、古來園内に生ぜるものとより成り、其數頗る多く、明治三十六年予が始めて花菖蒲の研究に着手せる頃、同園の花菖蒲番附に載せたるものは百五十に達し、此外にも尙優れる花品少からず、何れも一々花名を附せり。是等の品種の或るものは其後消滅し、又新に加はれるものあり、隨て實際園内に培養せる品種の數は多少の増減を免れず。最近小高園にて印刷せる「花菖蒲銘鑑」には總計百九十七品種を載せたり。

予の明治三十六年に檢せる小高園の花菖蒲は總計約二百六十品種にして一々其形態を記載せり。其中の約百品種は、予が大正十年に撰める「花菖蒲圖譜」に圖說せり。是等の品種は花品の優秀なるものたるは勿論、花の形態色彩等の點より學術上研究資料として有益なるもの亦少からず、

以下記載する百品種は概ね右の「花菖蒲圖譜」に公にしたるものに依れるも、而かも小高園に現存するものを採りたれば前書にあるものと悉く同一ならず。

品種の記載に先だち花菖蒲の形態色彩を表はす用語に關し聊述べんとす。

花菖蒲の花の莖に當たれる外花蓋が著大となり外部へ擴がり出で、而して花瓣に當たる内花蓋が細長く、直立せるものを茲に三瓣花と云ふ。舊時の所謂三英花なり。之に反し外花蓋が内花蓋と同形同大となれるものを六瓣花と稱す。是れ舊

時六英花と云へるものなり。此外に花形の不規則となれるものを狂咲と云ひ、特殊の形を呈するものを爪咲・玉咲・蓮華咲と云ひ、著しき畸態を現せるものを稀咲と云ふ。狂咲の花には雄蕊の半瓣狀となれるものあり、之を化生雄蕊と云ふ。又定數以外の雄蕊又は雌蕊の生ずることあり、之を副雄蕊又は副雌蕊と云ふ。

花部の色の一様なるを單色花と云ひ、外花蓋と内花蓋と色の異なるものを染分と云ふ。其他花蓋の斑入（か）となれるものは絞（しぼり）・更紗（さら）・緋（か）・砂子等の稱あり。

花蓋の質の薄くして柔なるを柔花と云ひ、厚くして堅きを堅花と云ふ。三瓣花には柔花多く、六瓣花には堅花多し。

花期には早咲・中咲・遅咲の區別あり。東京に於ける早咲は概ね六月中旬、中咲は二十日頃、遅咲は同月末なり。

花菖蒲の品種中菖翁の園より傳來せるものには已に定名あり。是等の品種にして後小高園に培養されたるものは何れも原名を變更せざりしが、他の花菖蒲園に移されたるものは必ずしも然らず。往々同一品種にして名稱異なるものありて、混雜を免かれず。凡べて菖翁の花菖蒲の品種名は古雅なるか又は由緒典故あるを以て、此點に於ては後世の命名に比して遙に妥當なり。（是等花菖蒲の花名の意義に關しては下文參考書目に掲げたるアグネス、リード夫人の論文を參照すべし）。予の前記の圖譜に於ては悉く小高園の名稱に據れるが、以下掲載する品種名も同様なるは言を俟たず。

### (一) 三瓣單色花

#### 一、伊達道具 *Iris ensata* Thunb. f. *datadogu*.

中咲、堅花、花徑約二二仙米、薄赤色、外花蓋の黃點の周圍は紫色を呈す。

#### 二、雜祭 *Iris ensata* Thunb. f. *hianatsuri*.

中咲、花徑約一六仙米、色形伊達道具に於けるが如きも、花柱著しく外部へ張り、且伊達道具に見る如き外花蓋の基



部の黄點の周圍に紫色なし。

一一

- 三、秀紫 *Iris ensata* Thunb. f. *shōshi*.  
遅咲、柔花、花徑約二三仙米、赤紫色。
- 四、大淀 *Iris ensata* Thunb. f. *ōyado*. (第十圖版)  
中咲、柔花、花徑約二三仙米、帶赤濃紫色。
- 五、若紫 *Iris ensata* Thunb. f. *wakamurasaki*.  
中咲、堅花、花徑約一六仙米、赤紫色。
- 六、鳳雛 *Iris ensata* Thunb. f. *hōsū*.  
中咲、花徑二〇仙米、紫色。
- 七、江戸自慢 *Iris ensata* Thunb. f. *edogimam*.  
早咲、堅花、花徑約一六仙米、濃紫色。
- 八、兔の色 *Iris ensata* Thunb. f. *usagi-no-iro*.  
中咲、堅花、花徑約一五仙米、濃純紫色。
- 九、大江戸 *Iris ensata* Thunb. f. *ōedo*.  
中咲、柔花、花徑約二四仙米、外花蓋片の幅約一二仙米に達す。淡紫色。内花蓋は赤色を帯ぶ。明治三十六年頃小高園に生ぜる新花にして、予の命名せるもの。優美なる品種なり。
- 一〇、富士の雪 *Iris ensata* Thunb. f. *fuji-no-yuki*.

早咲、堅花、圓形、花徑約一五仙米、白色。

- 一一、御幸傘 *Iris ensata* Thunb. f. *mitsukigasa*.

早咲、丸形花徑約一八仙米、白色。

- 一二、和歌浦 *Iris ensata* Thunb. f. *waka-no-ura*.

早咲、花徑約一八仙米、莖の高さ約九〇仙米、白地に淡藍紫の斑線全面に布けり。内花蓋の周縁にも同色の線ありて縁取となれり。

- 一三、初霜 *Iris ensata* Thunb. f. *hatsushimo*.

早咲、花徑約二二仙米、内花蓋甚小、白色。

- 一四、座間の森 *Iris ensata* Thunb. f. *zama-no-mori*. (第十圖版)

中咲、柔花、花徑約二七仙米、外花蓋片甚大きく薄くして垂れ、一面に縮緬狀の皺あり。白地に淡紫の斑線あること  
和歌浦に似たり。内花蓋は淡紫の縁取となれり。葉も柔にして先端屈垂す。三瓣大輪の花菖蒲として著し。

(二) 三 瓣 紋

- 一五、猿蹄 *Iris ensata* Thunb. f. *izarudori*.

早咲、圓花、花徑約一八仙米、一面に桃色の太き斑線あり。外花蓋片の基脚部は紫色を帯ぶ。

- 一六、岩戸の光 *Iris ensata* Thunb. f. *iwado-no-hikari*.

一般の特徴猿蹄に似たるも、花色更に濃く、一様に赤味強し。

- 一七、萩の里 *Iris ensata* Thunb. f. *hagi-no-sato*.

一三



- 中咲、柔花、花徑約一七仙米、淡小豆色に同色の濃き線あり。
- 一八、迦陵嚩伽 *Iris ensata* Thunb. f. *karyobinga*.  
中咲、堅花、圓形、花徑約二二仙米、白地に赤紫の更紗あり。
- 一九、紫衣の雪 *Iris ensata* Thunb. f. *shii-no-yuki*.  
中咲、堅花、花徑約二〇仙米、白地に紫線入り、雌蕊、副雄蕊共に濃紫色。
- 二〇、虹の巴 *Iris ensata* Thunb. f. *niji-no-tomoe*.  
中咲、柔花、花徑約二一仙米、赤紫色に白き縦線太く抜けり。
- 二一、瑞雨の光 *Iris ensata* Thunb. f. *zui-no-hikari*.  
中咲、柔花、花徑約二四仙米、外花蓋廣く、白色、内花蓋内面凹入、白色、縁紫色。
- 二二、野戦の櫻 *Iris ensata* Thunb. f. *gosen-no-sakura*.  
中咲、柔花、花徑約二一仙米、白地に赤紫の更紗あり。
- 二三、入日の灘 *Iris ensata* Thunb. f. *irihino-nada*.  
早咲、圓形、花徑約一五仙米、濃き赤紫の更紗あり。時として外花蓋の一部一樣なる赤紫色となることあり。
- 二四、蜀江錦 *Iris ensata* Thunb. f. *shokko-no-nishiki*.  
早咲、堅花、圓形、花徑約一五仙米、白地に淡紫色のぼかし及小豆色の砂子あり。
- 二五、鶴鶴樓 *Iris ensata* Thunb. f. *kakujakuro*.  
中咲、柔花、花徑約二四仙米、外花蓋片幅廣し。赤紫地に白き細線あり。花蓋片の周邊の色濃し。



- 二六、大鳴海 *Iris ensata* Thunb. f. *onarumi*.  
中咲、柔花、花徑約一八仙米、全面濃藤紫の更紗。内花蓋は海老紫なり。
- 二七、四海波 *Iris ensata* Thunb. f. *shikainami*.  
中咲、堅花、花徑約一七仙米、色形大鳴海に似たるも、花柱大きく外方へ張り、濃紫色なり。
- 二八、青龍刀 *Iris ensata* Thunb. f. *seiryūdo*.  
中咲、柔花、圓形、花徑約一五仙米、淡藤紫のぼかしに白の縦線あり。内花蓋赤紫色。
- 二九、都鳥 *Iris ensata* Thunb. f. *miyakodori*.  
中咲、花徑約一五仙米、赤紫色に白き線入り。
- 三〇、千代鶴 *Iris ensata* Thunb. f. *chiyoguzuru*. (第十圖版)  
中咲、花徑約一五仙米、外花蓋白地に淡紫線斷續せり。内花蓋海老紫の濃線あり。
- 三一、七福神 *Iris ensata* Thunb. f. *shichifukujin*.  
中咲、堅花、圓形、花徑約一八仙米、外花蓋は赤紫地に萌黄細線散布す。内花蓋は淡桃色、縁濃桃色。古花なり。
- 三二、色自慢 *Iris ensata* Thunb. f. *irojiman*.  
遅咲、柔花、縮緬狀、花徑約一八仙米、淡瑠璃地に白細線入り。色彩の殊に優れたる品種なり。
- (三) 三 瓣縁取
- 三三、立田川 *Iris ensata* Thunb. f. *tatsutagawa*.  
一に龍田川と書す。中咲、堅花。外花蓋の邊緣縮緬狀をなす。花徑約二一仙米、白地に淡赤紫細線ぼかし。花蓋の邊



縁は濃き同色の縁取となれり。

三四、由縁の霜 *Iris ensata* Thunb. f. *yukari-no-shimo*.

中咲、三瓣、堅花、圓形、花徑約一五仙米、赤紫地に同色の濃線入り。邊緣淡色にして縁取となれり。内花蓋は牡丹色。

三五、蓬萊宮 *Iris ensata* Thunb. f. *hōrai-kyū*.

中咲、三瓣、堅花、花徑約二一仙米、濃赤紫地に暗赤紫色の細線入り。花蓋の淡色縁取なること由縁の霜に於けるが如し。

三六、大鳥毛 *Iris ensata* Thunb. f. *ōtori-ga*.

中咲、三瓣、大輪、堅花、花徑約二四仙米、色彩縁取すべて前の二者に似たるも、色は稍淡し。内花蓋は匙形、海老紫色。

(四) 三瓣染分

三七、岩井城 *Iris ensata* Thunb. f. *iwai-jō*.

中咲、花徑約一八仙米、外花蓋は淡赤紫の砂子、内花蓋は小豆色の絞。

三八、君が恵 *Iris ensata* Thunb. f. *kimigae-megumi*.

遅咲、柔花、花徑約一八仙米、外花蓋淡紫地に濃紫細線入り、内花蓋海老紫色。

三九、千歳鶴 *Iris ensata* Thunb. f. *chitose-tsuru*.

中咲、堅花、圓形、花徑約二一仙米、外花蓋白色、往々淡紅色のぼかし。内花蓋赤紫の更紗。

四〇、青海波 *Iris ensata* Thunb. f. *seiha-no-nami*.

中咲、堅花、圓形、花徑約一五仙米、外花蓋白色又は淡紫のぼかしと同色の細線あり。内花蓋帶紫紅色。

(五) 六瓣單色花

四一、劍の舞 *Iris ensata* Thunb. f. *tsurugi-no-mai*. (第十一圖版)

中咲、圓形、花徑約二一仙米、帶紫赤色。

四二、獅子怒 *Iris ensata* Thunb. f. *shishinori*.

中咲、堅花、花徑約一八仙米、劍の舞に似たるも、花柱身白く邊緣赤紫色、化生雄蕊・化生雌蕊あり。全花帶紫赤色。

四三、熊奮迅 *Iris ensata* Thunb. f. *kumafujin*.

中咲、堅花、花徑約一八仙米、赤紫色。

四四、古稀の色 *Iris ensata* Thunb. f. *koki-no-iro*.

中咲、花徑約二一仙米、帶赤紫色、化生副雄蕊あり。

四五、霜夜の月 *Iris ensata* Thunb. f. *shimoyo-no-tsuki*.

中咲、堅花、花徑約一八仙米、白色。

四六、王昭君 *Iris ensata* Thunb. f. *shōkū-jū*.

中咲、堅花、花徑約二〇仙米、濃瑠璃紫色。

四七、黒雲 *Iris ensata* Thunb. f. *kurōkumo*. (第十二圖版)

遅咲、堅花、花徑約一八仙米、花蓋片の中央濃瑠璃色、外圍は濃紫色。



四八、萬代の波 *Iris ensata* Thunb. f. *bandai-no-nami*.

中咲、花徑約一八仙米、白色。

(六) 六瓣紋

四九、霞裳羽衣 *Iris ensata* Thunb. f. *geishouji*.

遅咲、柔花、花徑約二〇仙米、濃帯紫赤地に白の線入。

五〇、紅葉の瀧 *Iris ensata* Thunb. f. *momiji-no-taki*. (第十一圖版)

遅咲、堅花、花徑約二〇仙米、白地に赤紫の更紗線入り。花蓋片の基部の黄點の周圍は紫色のぼかし。數本の副雌蕊あり。雄蕊の上端の裂片は濃紅紫色。

五一、茶臺 *Iris ensata* Thunb. f. *chudai*.

中咲、堅花、花徑一五仙米、内花蓋は稍小、内外花蓋とも白地に帯紫紅色の縁取、花面扁たく、多少受咲なるにより名を得たり。

五二、泉川 *Iris ensata* Thunb. f. *izumi-gawa*. (第十三圖版)

遅咲、堅花、圓形、花徑約一八仙米、白地に濃紫線入り、雌蕊、副雌蕊共に濃紫色。

五三、神代の昔 *Iris ensata* Thunb. f. *kamiyo-no-mukashi*.

早咲、堅花、花徑約一八仙米、泉川に似たれども、花蓋の紫色のぼかし強し。

五四、真鶴 *Iris ensata* Thunb. f. *manazuru*. (第十三圖版)

中咲、堅花、圓形、花徑約二二仙米、白地に淡紫の線あり。雌蕊は淡紫色。

五五、長生殿 *Iris ensata* Thunb. f. *chouseiden*.

中咲、堅花、花徑約一五仙米、内花蓋稍小。全體鮮紅色、中央白線入りぼかし、恰も紅色縁取の如くなれり。

五六、餘吾湖 *Iris ensata* Thunb. f. *yogo-no-umi*.

中咲、堅花、花面扁たく、花徑約一五仙米、淡紫地に濃紫線入。内花蓋稍小、半化生雄蕊あり。

五七、七寶 *Iris ensata* Thunb. f. *shippo*. (第十三圖版)

中咲、堅花、花徑約二二仙米、外花蓋圓形扁平、内花蓋稍小、瑠璃紫地に白太線入り。半化生雄蕊あり。

五八、七小町 *Iris ensata* Thunb. f. *nanakomachi*. (第十二圖版)

中咲、堅花、花徑一八仙米、全面藤紫濃淡不同の更紗。

五九、明石潟 *Iris ensata* Thunb. f. *akashi-gata*.

中咲、堅花、花徑約二二仙米、赤紫地に白線入り。

六〇、浪乘船 *Iris ensata* Thunb. f. *naminorifune*.

中咲、花徑約一八仙米、淡紫地に白線入り。

六一、五節の舞 *Iris ensata* Thunb. f. *gosechi-no-mai*.

中咲、堅花、花徑一八仙米、淡藤紫ぼかしに濃き同色線入り。莖の丈高し。

六二、三光紫 *Iris ensata* Thunb. f. *sankoumurasaki*.

中咲、堅花、花徑約一七仙米、濃帯赤紫色の濃き線入り。

六三、花錦 *Iris ensata* Thunb. f. *hananishiki*. (第十一圖版)



- 中咲、堅花、花徑、約一八仙米、海老紫地に白線入り。
- 六四、由縁の色 *Iris ensata* Thunb. f. *yukari-no-iro*.  
中咲、堅花、淡赤紫地に白緋白入、化生雄蕊あり。
- 六五、花御所 *Iris ensata* Thunb. f. *hanagoshō*.  
遅咲、柔花、縮緬狀、花徑約二一仙米、化生雌蕊あり、白地に淡紫絞あり。
- 六六、吹寄 *Iris ensata* Thunb. f. *fukiyose*.  
遅咲、柔花、花徑約一八仙米、白地に紫更紗あり。
- 六七、花葵 *Iris ensata* Thunb. f. *hananoi*.  
遅咲、堅花、花徑約一五仙米、白地に紫線入りぼかし。雄蕊柱暗紫色。
- 六八、寶遊 *Iris ensata* Thunb. f. *takarawashi*.  
早咲、堅花、圓形、花徑約一七仙米、瑠璃紫地に白細線入り。
- 六九、滋賀浦波 *Iris ensata* Thunb. f. *shiga-no-urawami*. (第十二圖版)  
早咲、堅花、花徑約一七仙米、色彩寶遊に似て濃し。
- 七〇、照田 *Iris ensata* Thunb. f. *teruta*.  
中咲、花徑約一五仙米、白地に淡紫ぼかし。花蓋の黄點の周圍濃紫色となり、それより同色の線出でたり。
- 七一、春日野 *Iris ensata* Thunb. f. *kasugino*.  
中咲、堅花、花徑約一八仙米、淡藤色ぼかし、同色の濃き線入り。

- 七二、天の川 *Iris ensata* Thunb. f. *ama-no-gawa*.  
中咲、堅花、花徑約一五仙米、白地に瑠璃紫ぼかし。
- 七三、湖水の色 *Iris Thunb.* f. *kosui-no-iro*. (第十三圖版)  
中咲、堅花、花徑約一八仙米、極淡藍地に同色細線入り。
- (七) 狂 咲
- 七四、酒中花 *Iris ensata* Thunb. f. *shuchūka*.  
中咲、堅花、不規則なる受咲、花徑約二一仙米、赤紫地の中央に粗き白線あり。化生雄蕊及副雌蕊あり。
- 七五、藤娘 *Iris ensata* Thunb. f. *fujimusume*.  
中咲、堅花、花徑約二〇仙米、赤紫及藤紫の更紗。化生雄蕊、副雌蕊多し。明治三十六年頃小高園に生ぜる新花にして、予の命名したるもの。
- 七六、利勝の玉 *Iris ensata* Thunb. f. *rishō-no-tama*.  
中咲、柔花、花徑約一八仙米、淡藤砂子に濃紫線入り。赤紫色の化生雄蕊及副雌蕊あり。
- 七七、宇宙 *Iris ensata* Thunb. f. *uchū*.  
遅咲、柔花、縮緬狀、花蓋内卷、花徑約一七仙米、白地に淡瑠璃更紗、半化生瓣狀雄蕊及半化生雌蕊あり、狂咲。
- 七八、笑布袋 *Iris ensata* Thunb. f. *waraihokuro*. (第九圖版)  
遅咲、堅花、花徑約二一仙米、花蓋片は屈曲せり。藤紫ぼかし、濃き同色の線入り、裏面紫色。多數の化生雄蕊及副雌蕊花心に束立し、獅子頭をなせり。



七九、萬里婦 *Iris ensata* Thunb. f. *banryū*.

中咲、堅花、花徑約一七仙米、赤紫の更紗に同色の濃き線入り、並に縁取り。六瓣の外に化生雄蓋の瓣状となれるものあり。

八〇、紫雲の瀧 *Iris ensata* Thunb. f. *shim-no-taki*.

遅咲、花徑約二四仙米、赤紫地に白細線入り。黄點の附近に濃紫のぼかしあり。花心に多くの化生雄蓋及化生雌蓋東立す。

八一、鳳臺 *Iris ensata* Thunb. f. *hōdai*.

中咲、花徑約二一仙米、花形紫雲の瀧に似たり、色彩は一層濃紫なり。

八二、連城壁 *Iris ensata* Thunb. f. *renjo-no-tama*.

遅咲、柔花、縮緬状、花徑約二二仙米。淡藤紫色、粗き線ほかし、兩蓋化生東立。

八三、唐織錦 *Iris ensata* Thunb. f. *karayorishiki*.

中咲、堅花、花徑一七仙米、六瓣の外に化生雄蓋の瓣状となれるものあり。藤紫と赤紫の更紗絞。化生雌雄蓋あり。

八四、獅子踊 *Iris ensata* Thunb. f. *shishiodori*.

遅咲、堅花、花徑約一八仙米、帶紫赤色、瓣状の化生雄蓋ありて花心より高く出づ。

(八) 稀 咲

八五、黒龍 *Iris ensata* Thunb. f. *kokuryū*.

中咲、堅花、三瓣、濃紫色、花開かずして寶珠状をなす。

八六、龍の爪(閉花の爪) *Iris ensata* Thunb. f. *ryū-no-tsume*. (第十五圖版)

中咲、堅花、白色、三瓣、花全く開かざるものと、隣れる瓣の縁互に離れ上方にて尙附着せるものとあり。

八七、龍の爪(半開花の爪) *Iris ensata* Thunb. f. *ryū-no-tsume*.

龍の爪には閉花のもの、外に、花の多少開くものあり。

八八、龍の玉 *Iris ensata* Thunb. f. *ryū-no-tama*. (第十五圖版)

中咲、三瓣、淡赤紫色、閉花なり。

八九、玉寶蓮 *Iris ensata* Thunb. f. *gyokuhoren* (*nelumbiflora*). (第十五圖版)

中咲、三瓣、花徑約一〇仙米、淡赤紫地に同色の線入り。花形の蓮花の如くなれるによりて著し。

九〇、蓮香城 *Iris ensata* Thunb. f. *renkyōjō*.

中咲、六瓣、花徑約一二仙米、海老紫地に同色の濃細線あり、先端に至りて著し。内花蓋稍小、半化生雄蓋あり。花蓋片内方へ屈曲し、蓮花に於けるが如し、外觀多少玉寶蓮に似たり。

九一、八重勝見 *Iris ensata* Thunb. f. *yaekatsumi*.

遅咲、堅花、花徑約一五仙米、三瓣をなせる外花蓋は白地に淡藤紫砂子ほかし。内花蓋狭小、披針状、暗海老紫色、此内部に更に三枚の稍大なる副花蓋あり。外花蓋も略色を同じくす。斯く花心に副花蓋の立つにより、雌蓋は外部より見えず。珍奇なる畸態なり。

九二、銀玉 *Iris ensata* Thunb. f. *ginyoku*.

早咲、三瓣、堅花、花徑約九仙米、玉咲又は、蓮華咲となる。白色。



九三、折鶴 *Iris ensata* Thunb. f. *orizuru*.

早咲、六瓣、堅花、花徑約一二仙米、瓣の縁内方に折れ込み、狭長となれり。白色半爪咲のものもあり。

九四、十二一重(四瓣花) *Iris ensata* Thunb. f. *janithoe* subf. *quadripetala*. (第十四圖版)

中咲花徑約一八仙米、花蓋片狭長、幅状をなす。外花蓋、内花蓋、雄蕊、雌蕊、皆四の數より成る。外花蓋は帶濃赤色、内花蓋は細長く赤味強し。

九五、十二一重(五瓣花) *Iris ensata* Thunb. f. *janithoe* subf. *pentapetala*. (第十四圖版)

前者に似、唯花の部分の五となれるものなり。十二一重は鳶尾科植物の花部の基本數たる三より四又は五となれるの點に於て著しき畸態と云ふべし、稀咲中の奇品なり。

九六、赤寶冠 *Iris ensata* Thunb. f. *sekihōkan*.

遅咲、花徑約一七仙米、花蓋片九、往々八、或は十のものあり。雄蕊并に雌蕊も定數より増加し、四、五本より七、八本に至る。此外に不完全なる雄蕊の存在せるものあり。全體帶紫赤色なるも雌蕊は暗紫赤色なり。本品種は十二一重より化生せるものなり。又別に紫寶冠と稱し、花形は赤寶冠に似色は瑠璃紫なるものあり。

九七、加茂川 *Iris ensata* Thunb. f. *kanogawa*. (第十圖版)

中咲、三瓣、堅花、花徑約一八仙米、白地に赤紫の太線一面に入る。外花蓋片の邊緣内方へ巻き込み、受咲となり、三角状の花形に見ゆ。

九八、葵車 *Iris ensata* Thunb. f. *aoiguruma*. (第十二圖版)

中咲、六瓣、堅花、花徑約一五仙米、淡藍紫地に同色の濃き線入りぼかし。雌蕊は赤紫色。六瓣幅状に出で車咲をな

す。

九九、田毎の月 *Iris ensata* Thunb. f. *tagoto-no-tsuki*.

遅咲、六瓣、堅花、花徑約一五仙米。淡瑠璃紫地に赤紫綾入り、花形は葵車と同じく車咲なり。

一〇〇、天女の冠 *Iris ensata* Thunb. f. *tenjo-no-kanmuri*.

遅咲、十二瓣、堅花、花徑約一五仙米、花蓋の外輪六枚、内輪六枚、完全雄蕊六本、不完全雄蕊六本、雌蕊六本、子房六室となれるを正式とす。他には是等の部分の多少不規則となれるもあり。花色は紅地に白線入り、長生殿に於けるが如し。

### 七文 獻

(一) 花菖蒲の總説並に花菖蒲園殊に堀切小高園に關するもの

三好 學 日本植物景觀 第一集 明治三十六年

同 日本之植物界 三四七頁 明治四十三年

同 増訂植物生態美觀 二四七頁 大正元年

同 天然紀念物解説 四一四頁 大正十五年

同 堀切の花菖蒲(「史蹟名勝天然紀念物」第一集第七號 大正十五年)

同 花菖蒲と花菖蒲園(「史蹟名勝天然紀念物」第七集第七號 昭和七年)

同 (名勝)堀切小高園(「天然紀念物調査報告」植物之部、第一四輯 第四七頁 昭和九年)



堀切花菖蒲小高園由來(寫本) 明治二十八年  
花房子爵執筆 とあり。

Reed, George M., The Iris in Japan. Bulletin of the American Iris Society, July 1933.

Reed, George M., Report on a trip to Japan and to the Northwestern United States. Brooklyn Botanic Garden

Record, XIX. 6. November 1930.

Reed, Agnes, L., The significans of Japanese names for Iris. Bulletin of the American Iris Society, July 1929.

日本の花菖蒲の花名の意義を一々解説したるものなり。

松平左金吾 花菖蒲培養録(寫本) 一冊

嘉永六年の自序の次に花菖蒲培養の由來並に培養法を述べたるもの。書中に二十一品種の花菖蒲の花の着色圖と草表裏圖とを載す。

同 花菖蒲培養録(寫本) 一冊

前書と同じきも嘉永元年の自序あり。書中の文句前書に比して出入あり。

戸川 殘花 松平菖翁(「史蹟名勝天然紀念物」第三卷第六號、第四六頁 大正八年)

菖翁の系圖を挙げ、其他の短文記事あり。

東京市稿 遊園篇 第二、第九七一頁—九九九頁

「隅田川叢誌」によれる堀切小高園の記事、松平菖翁の「花菖蒲培養録」の全文、菖翁の花菖蒲の花銘、

菖翁の官歴等を挙げたるもの。

川村 恒喜 松平菖翁の宅趾其他(「今昔」第二卷、第六號、第一九頁、昭和六年)

(二) 花菖蒲の花名に關するもの

松平左金吾 花菖蒲花銘(寫本) 一冊

菖翁の園中培養の花菖蒲の品種百二十種の名を列記し一々簡單なる記載あり。いもしげ舊藏にして、帝國圖書館藏本の複寫なり。

同 菖花譜(寫本) 一冊

初に菖翁松平家の園中の花菖蒲の奇種百九十一種の名稱と略説、次に戸川公園中奇種二十九種の名稱と略説、終に菖翁園中の品種百二十種の名稱と略説を載せたり。右の中菖翁の品種並に前記の「花銘」の品種は互に重複せり、但し品種排列の順序は頭初の部分を除き其他は同じからず。

本書は故白井光太郎所藏本の複寫なり。

上妻 博之 熊本の園藝(「史蹟名稱天然紀念物」第一集第七號 大正十五年)

熊本の園藝殊に花菖蒲に關する培養の來歴を述べたるものなり。

(三) 花菖蒲の群落に關するもの

Miyoshi, M., Über die Assoziation einer violettblühenden Iris. Proceedings of the Imperial Academy, IX. (1933), 8.

Miyoshi, M., Über die Variabilität der Hanashobu (*Iris ensata* Thunb.) im wilden Zustande. Proceedings of the Imperial Academy, X. (1934), 10.



(四) 花菖蒲の圖譜に關するもの

三好 學 花菖蒲圖譜 四冊 大正十年 芸艸堂  
同 花菖蒲解説 一冊 同

右の圖譜には野生花菖蒲の圖版一、培養花菖蒲の圖版九十九、外に花菖蒲の色の進化に關する圖版五を載せたり、何れも木版着色圖なり。

Reed, George W., and Matsuki, B., Translation of the explanatory text of Doctor Manabu Miyoshi's Illustrated Album of Hana-shobu. Reprinted. 1932.

前記の「花菖蒲解説」をリード氏及松木文恭氏の英譯したるものなり。

吉野 園 吉野園花菖蒲圖目錄 美濃全紙百枚 一冊 明治三十六年頃

吉野園に培養せる花菖蒲百品種の花の輪廓を木板にて表し、之に淡彩を施したるものにして、表紙に「Iris Kaempferi Japanese Iris. 100 varieties selected」と記せり、外國輸出向の圖目錄なるべし。

(五) 花勝見に關するもの

加茂 眞淵 はなかつみ 寫本 一冊  
粕 諸成 かつみ考  
屋代 弘賢 かつみ考 寛政年間  
多賀 常政 花かつみ之考 安永九年  
他田 維章 花かつみの追考

小野 高潔 花かつみ贅考

藤塚 知明 花勝美考 寛政七年

右の粕諸成以下の著は從來何れも寫本として傳はれるものを明治四十五年「百家叢說」第三に收めたり。

大竹 信定 花勝美考 寫本 一冊

(六) 一般アイリスニ關するもの

Alphabetical Iris check list. American Iris Society. 1929.

現在知られたる世界の「アイリス」の名稱目錄なり。

Dykes, W. B., The genus Iris. 1913.

五十三種の「アイリス」を彩色圖に表し、詳細なる説明を附けたる大本なり。

Dykes, W. B., Irises.

“Present Day Gardening”の一として著せるものにして、八種の「アイリス」の彩色圖を載せ、園藝方面より説明せる小冊子なり。

Dykes on Irises. Compiled and edited by G. Dillistone. 1930.

アイリス屬の研究に多大なる貢獻を爲せる英國のダイクス氏が先年歿するまで過去殆二十年間此方面の雜誌、定期刊行物に掲載せる論文を集録せるものなり。

Miyoshi, M., Notes on Japanese Irises. The Iris Yearbook. 1931.

日本のアイリスの概説にして英國のアイリス協會の依頼により起稿せるものなり。



Small, J. K., Addisonia, Vol. 9, No. 4, 1914, Vol. 12, No. 1, 1927, Vol. 14, No. 1, 1929.

「アヂソニア」は植物の彩色圖と説明とを掲載する雑誌にして、上記の三號に亘り米國産アイリス屬二十四種 of 美麗なる寫生圖と記載あり。

東京府史蹟保存物調査報告書刊行目錄

- 東京府史蹟寫眞帖 全一册 大正八年三月
- 東京府民政史料 全一册 大正九年十二月
- 東京府史蹟勝地調査報告書 第一册 大正十二年三月  
〔武藏國分寺址の調査〕
- 東京府史蹟名勝天然紀念物調査報告書 第一册 大正十三年三月  
〔天然紀念物老樹大木の調査〕
- 同右 第三册 大正十四年三月  
〔府下に於ける重要なる史蹟〕
- 同右 第四册 大正十五年五月  
〔府下に於ける重要なる史蹟〕



東京府史蹟名勝天然紀念物調査報告書 第五册

昭和二年五月

東京府史蹟保存物調査報告書 第六册

昭和四年二月

東京府史蹟調査報告書 第七册

昭和五年三月

東京府名勝天然紀念物調査報告書 第八册

昭和六年四月

東京府史蹟調査報告書 第九册

昭和七年三月

東京府史蹟保存物調査報告書 第十册

昭和八年三月

東京府史蹟保存物調査報告書 第十一册

昭和九年五月

名勝堀切小高園平面圖

凡

指定区域

小高園

使用区域

菅

蒲

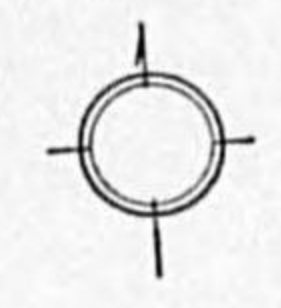
園

畑

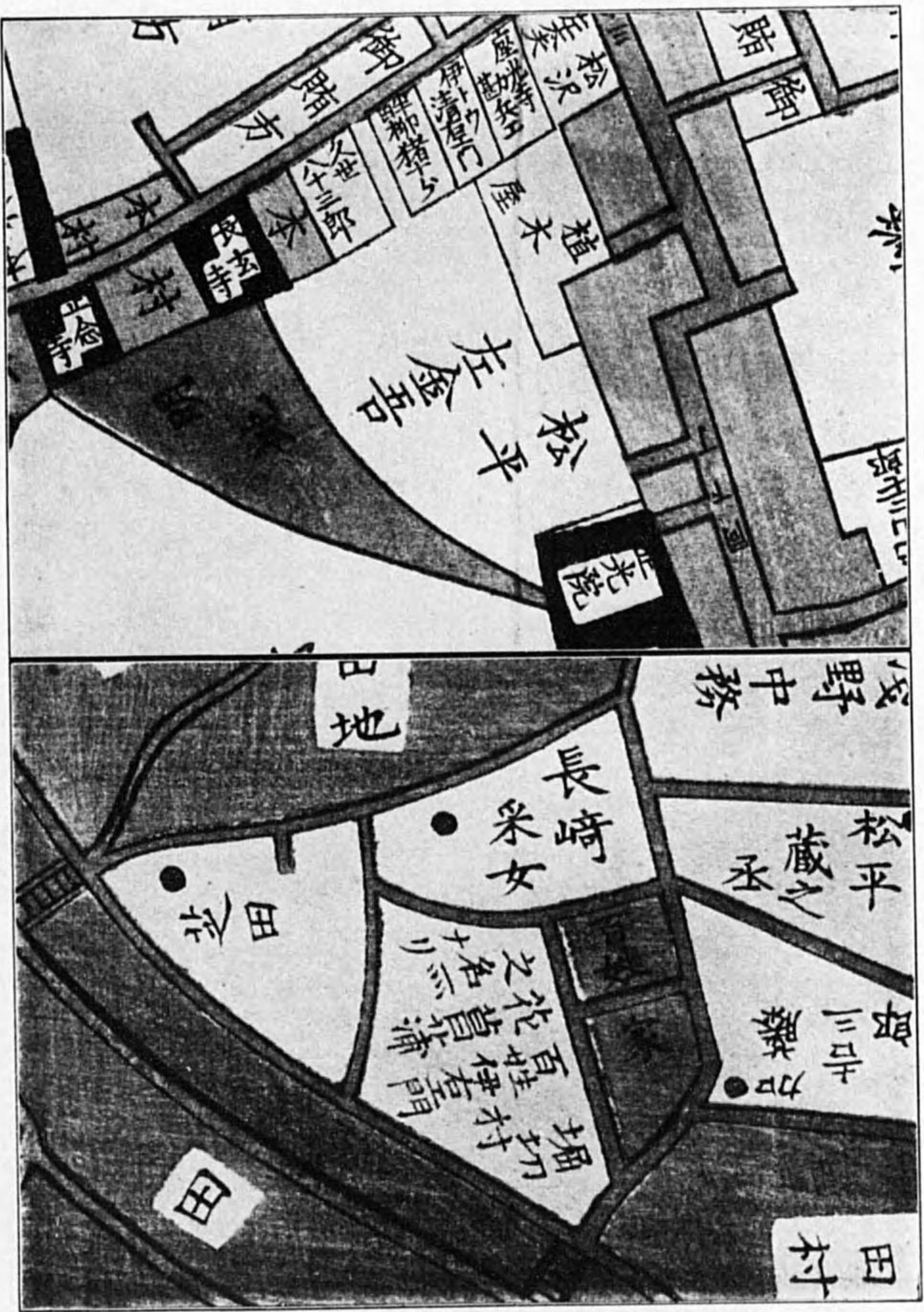
花卉園



# 名勝堀切小高園平面圖

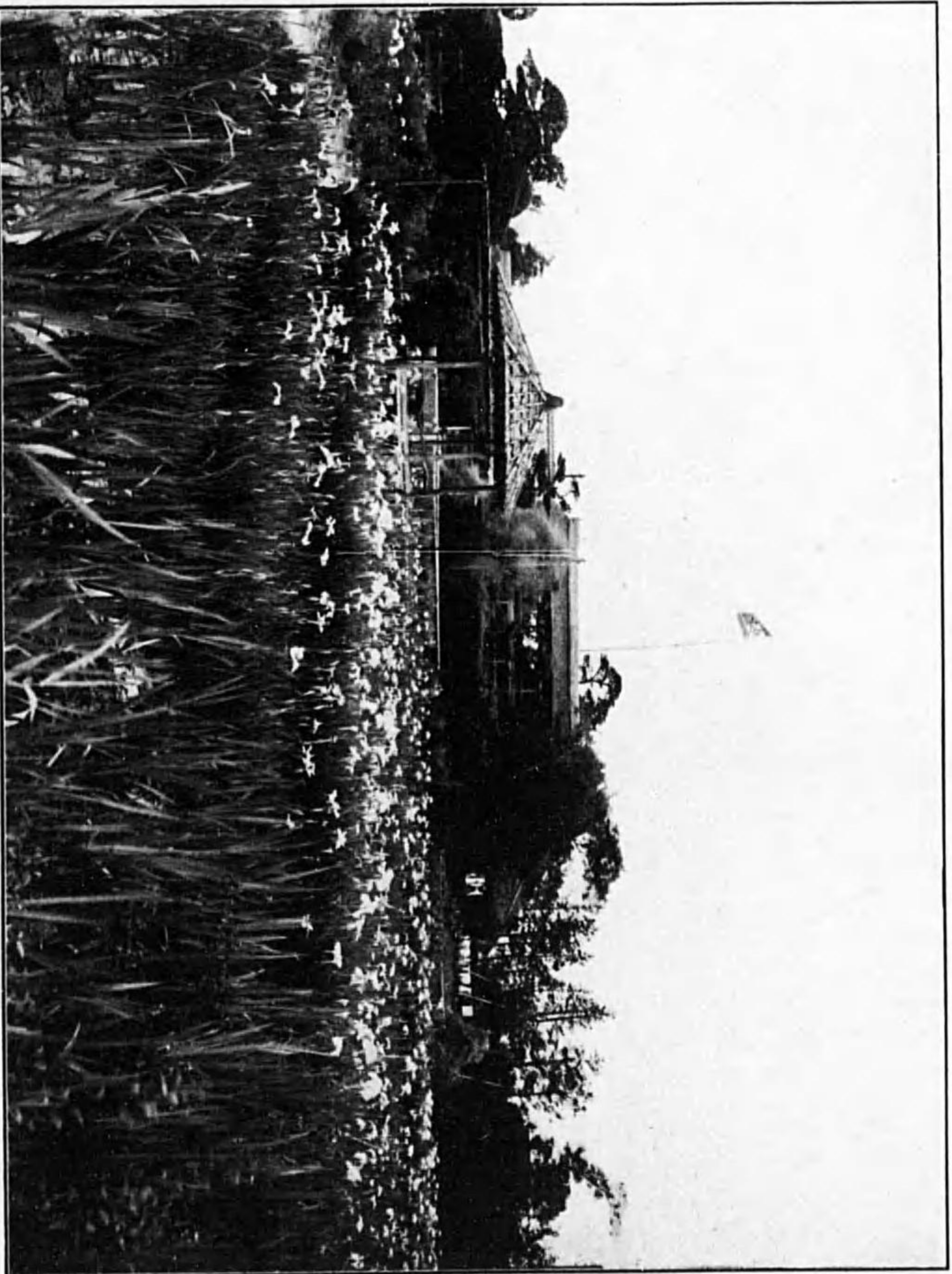






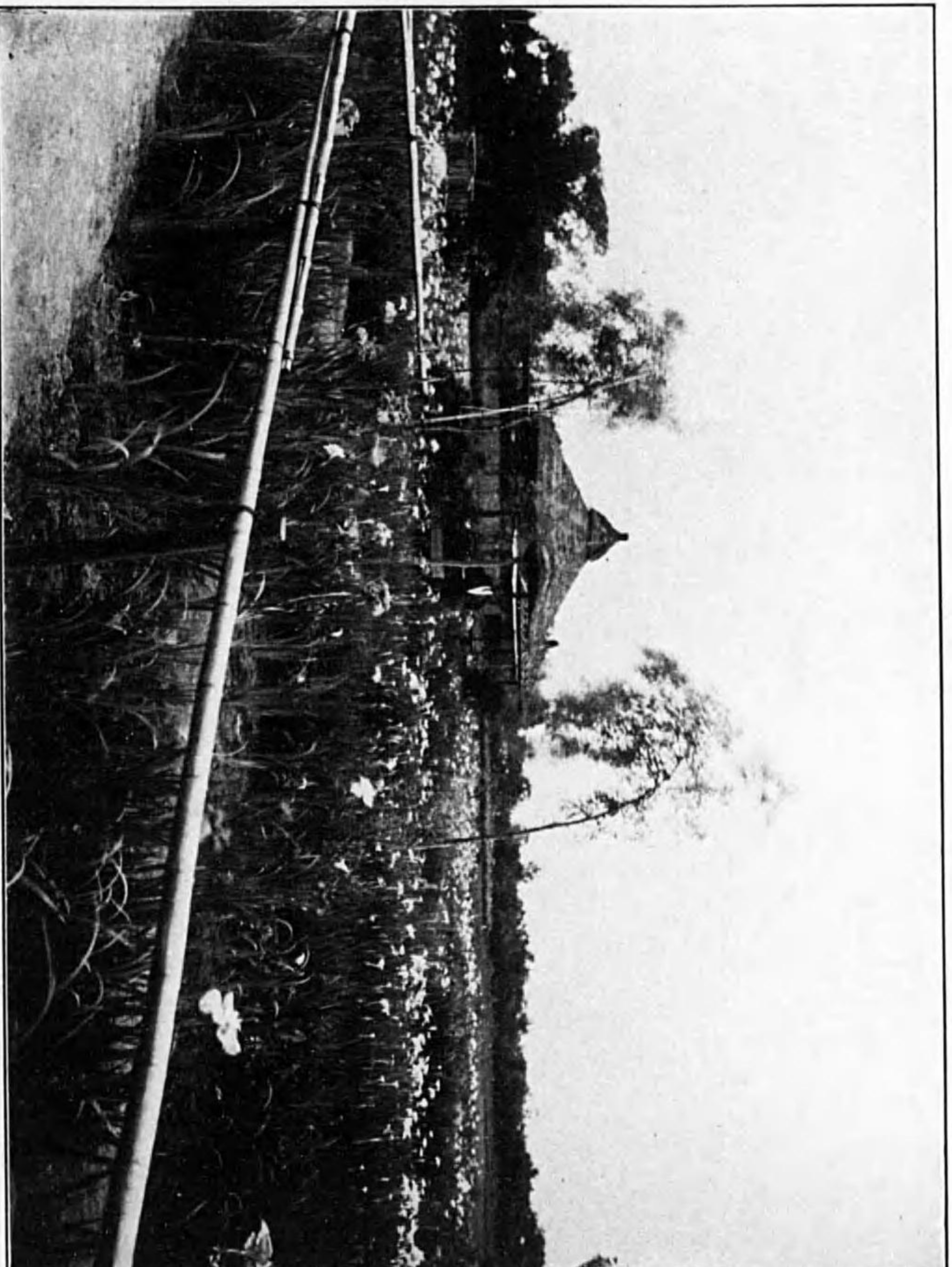
（るよに圖切戸江年三政安）在所の園高小るけ於に代時戸江（右） 版圖一第  
 （るよに圖切戸江年四永嘉）在所の邸吾金左平松（左）





(一) 菖 菖 花 の 園 高 小 切 堀 版 圖 二 第  
View of the Kotakaen, the oldest Iris garden at Horikiri, Tokyo. (1)





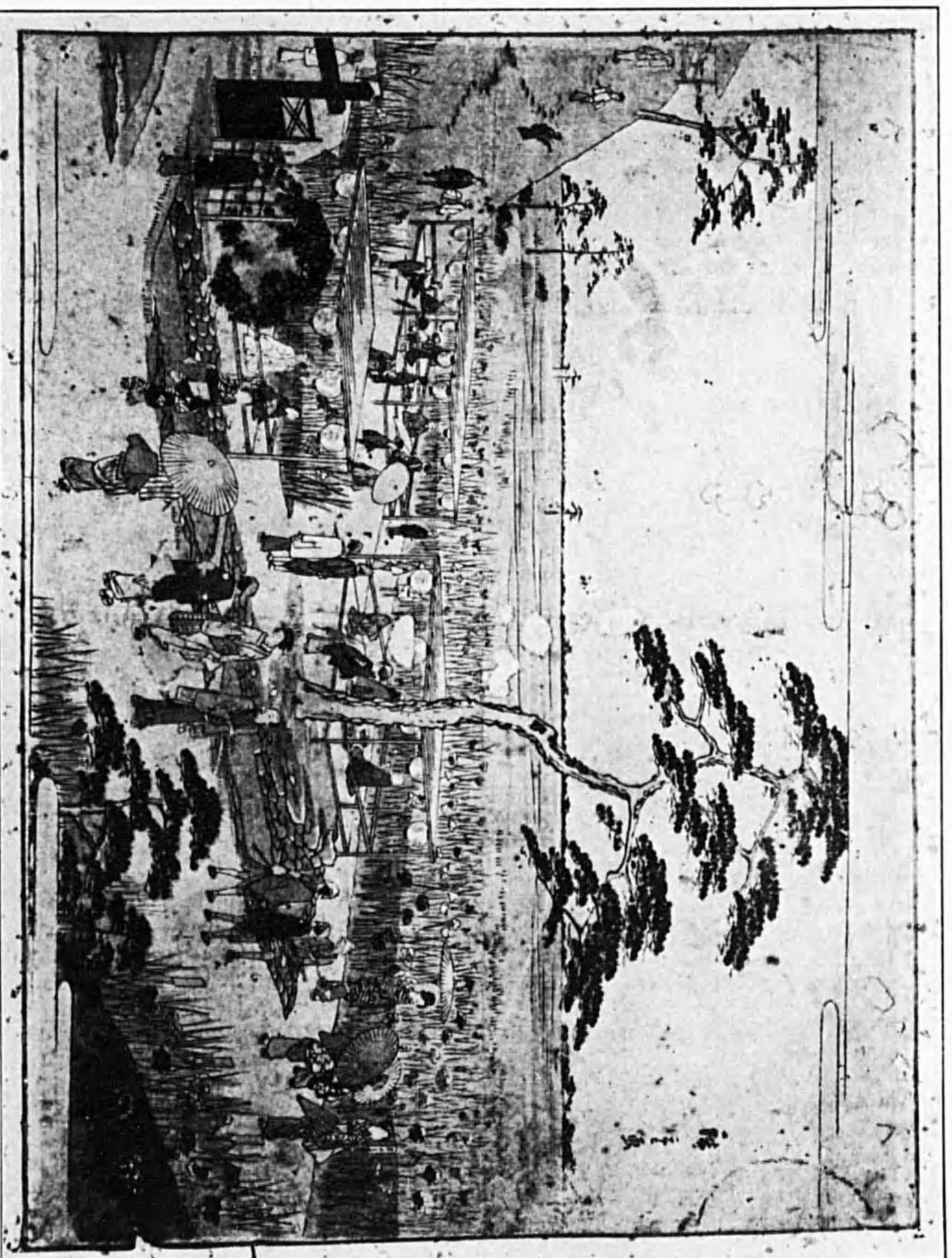
(二) 菖 菖 花 の 園 高 小 切 堀 散 園 三 第  
View of the Kotakaen, the oldest Iris garden at Horikiri, Tokyo. (2)





(三) 菫草花の園高小切堀 版圖四第  
View of the Kotakaen, the oldest Iris garden at Horikiri, Tokyo. (3)





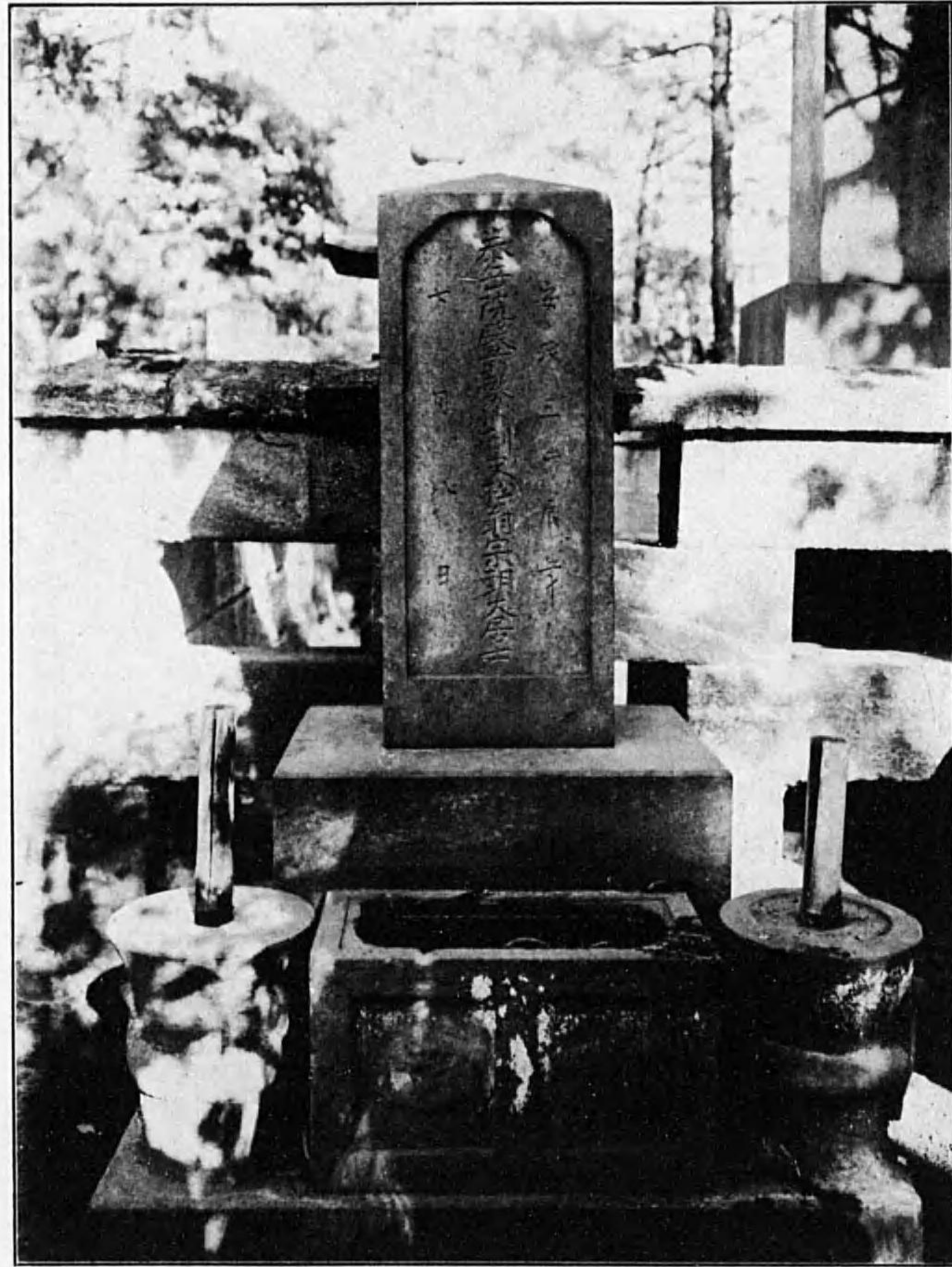
園高小るたれ理に繪世浮の重廣 版圖五第  
View of the Kotakaen at Horikiri, a colour print of Hiroshige.





第六圖版 尾張大納言齊莊小園菖蒲花の關に畫す





(寺禪海東區川品市京東) 墓の翁菖平松 版圖七第

Grave stone of Showo Matsudaira (1773—1856), who achieved a great success in producing numerous garden varieties of Hanashobu (*Iris ensata* Thunb. syn. *Iris Kaempferi* Sieb.)





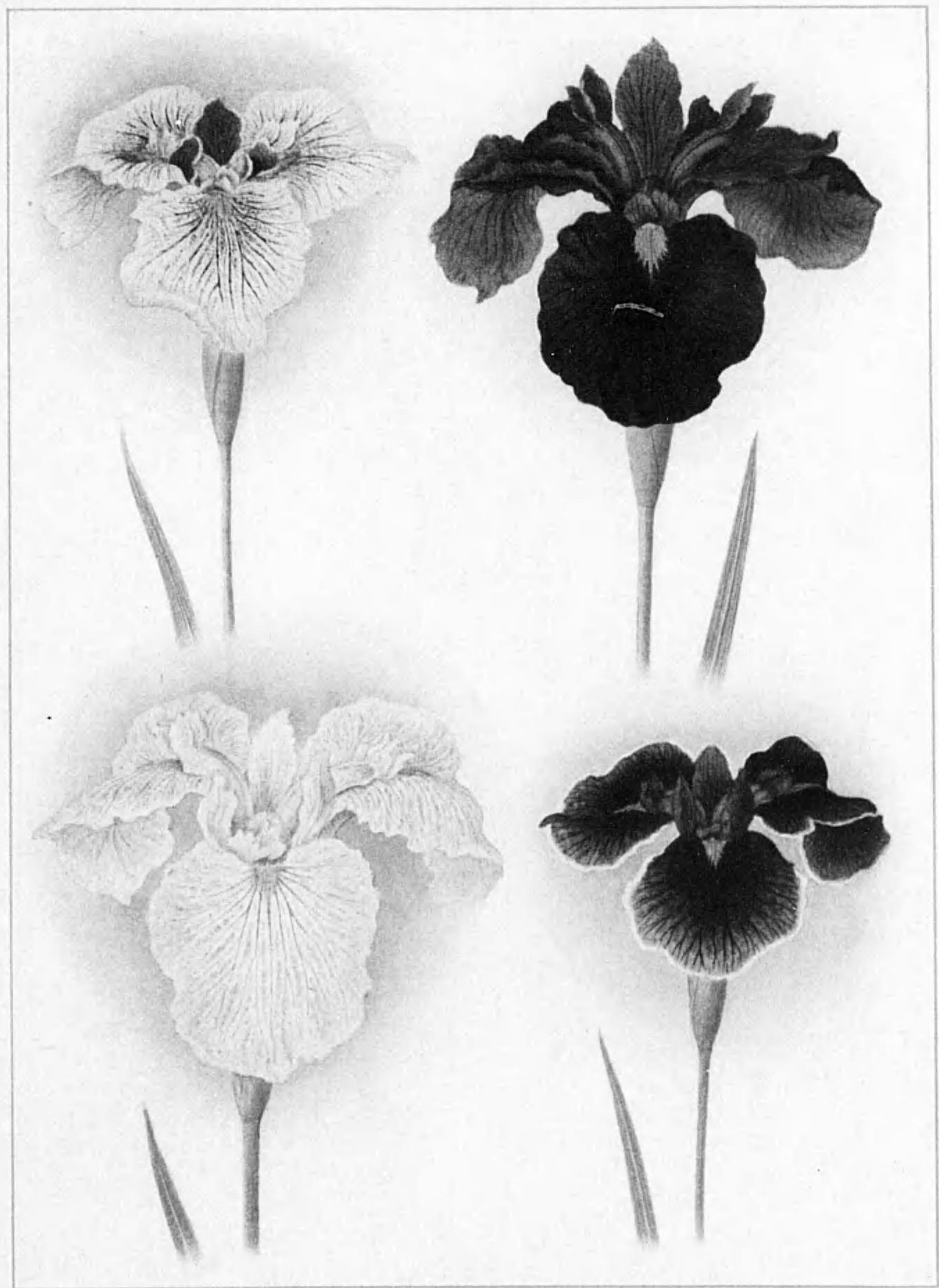
(大然白) 菖菖花紫 (左) ノモキ淡稍ノ色花 (下) ノモノ通普 (右) 菖菖花生野 版圖八第  
 Right *Iris ensata* Thunb. (syn. *Iris Kaempferi* Sieb.) var. *typica* Miyos.  
 Below The same with a paler flower colour.  
 Left *Iris ensata* Thunb. (syn. *Iris Kaempferi* Sieb.) var. *violacea* Miyos. (nat. size.)





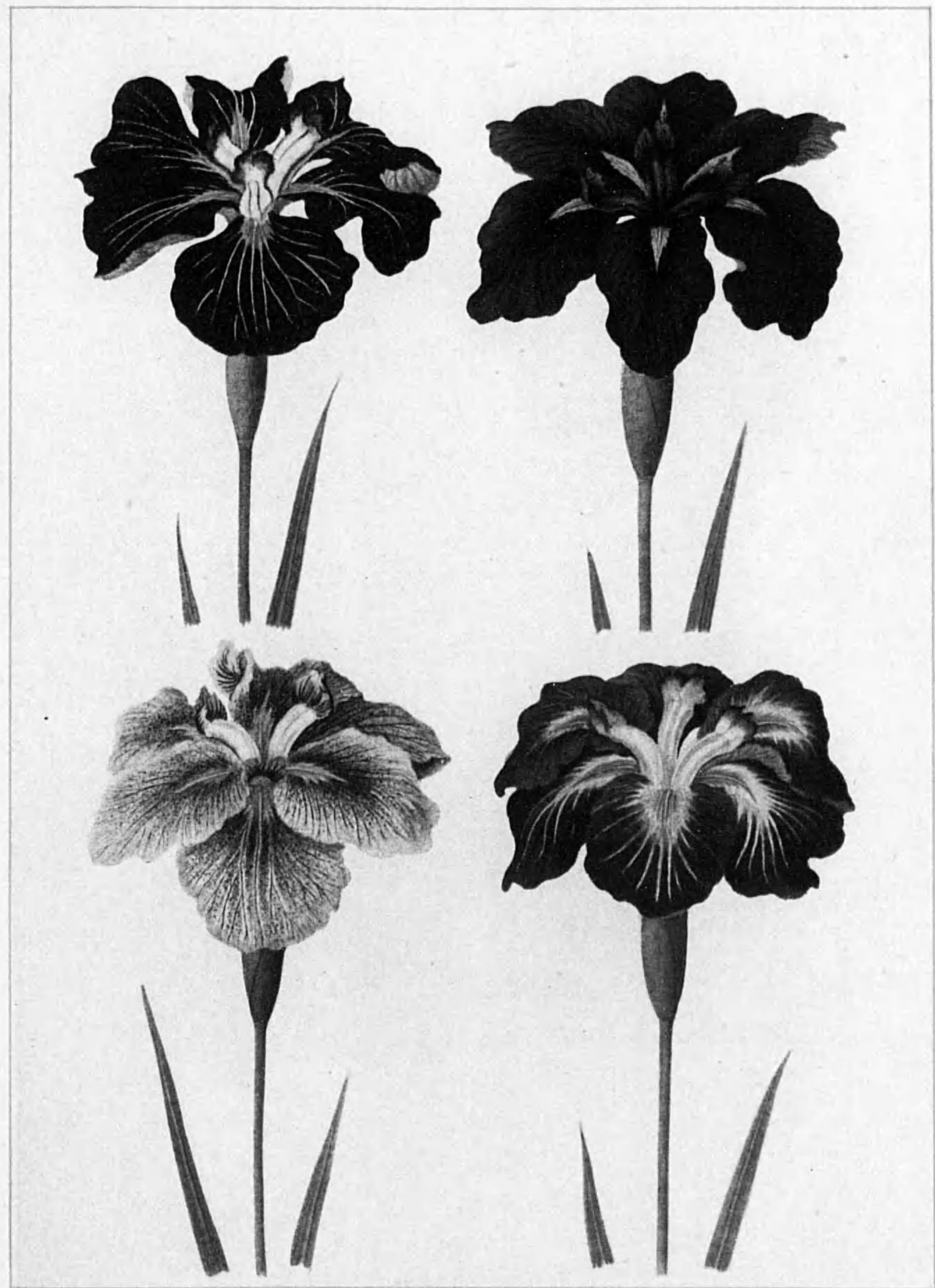
(大然自) 袋布笑 版圖九第  
*Iris ensata* Thunb. (syn. *Iris Kaempferi* Sieb.) f. *waraihotai*. (nat. size.)





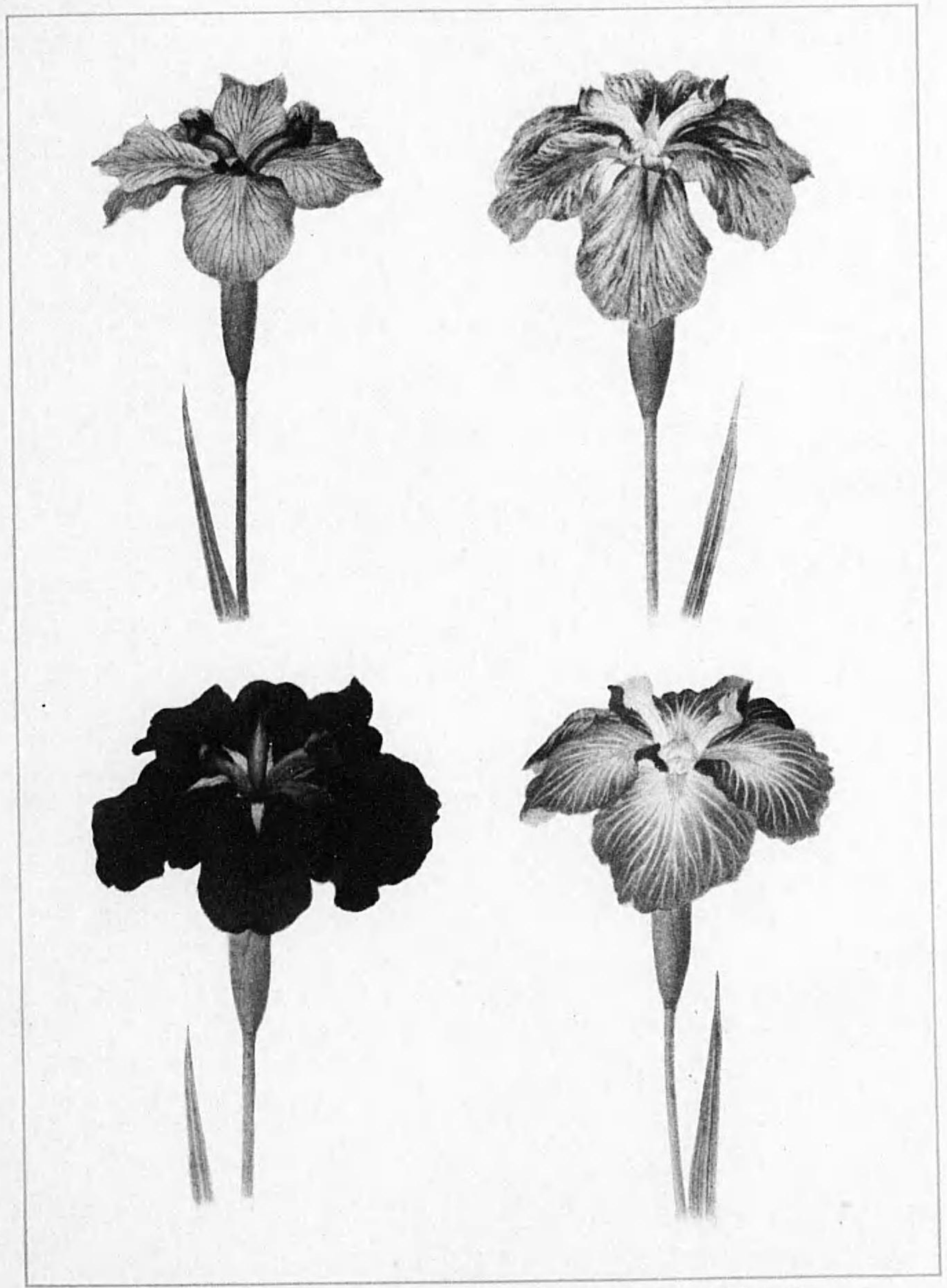
森の間座 (下左) 鶴代千 (上左) 川茂加 (下右) 淀大 (上右) 版圖十第  
 Right above *Iris ensata* Thunb. (syn. *Iris Kaempferi* Sieb.) f. *oyodo*.  
 Right below *Iris ensata* Thunb. (syn. *Iris Kaempferi* Sieb.) f. *kamogawa*.  
 Left above *Iris ensata* Thunb. (syn. *Iris Kaempferi* Sieb.) f. *chiyozuru*.  
 Left below *Iris ensata* Thunb. (syn. *Iris Kaempferi* Sieb.) f. *zama-no-mori*.





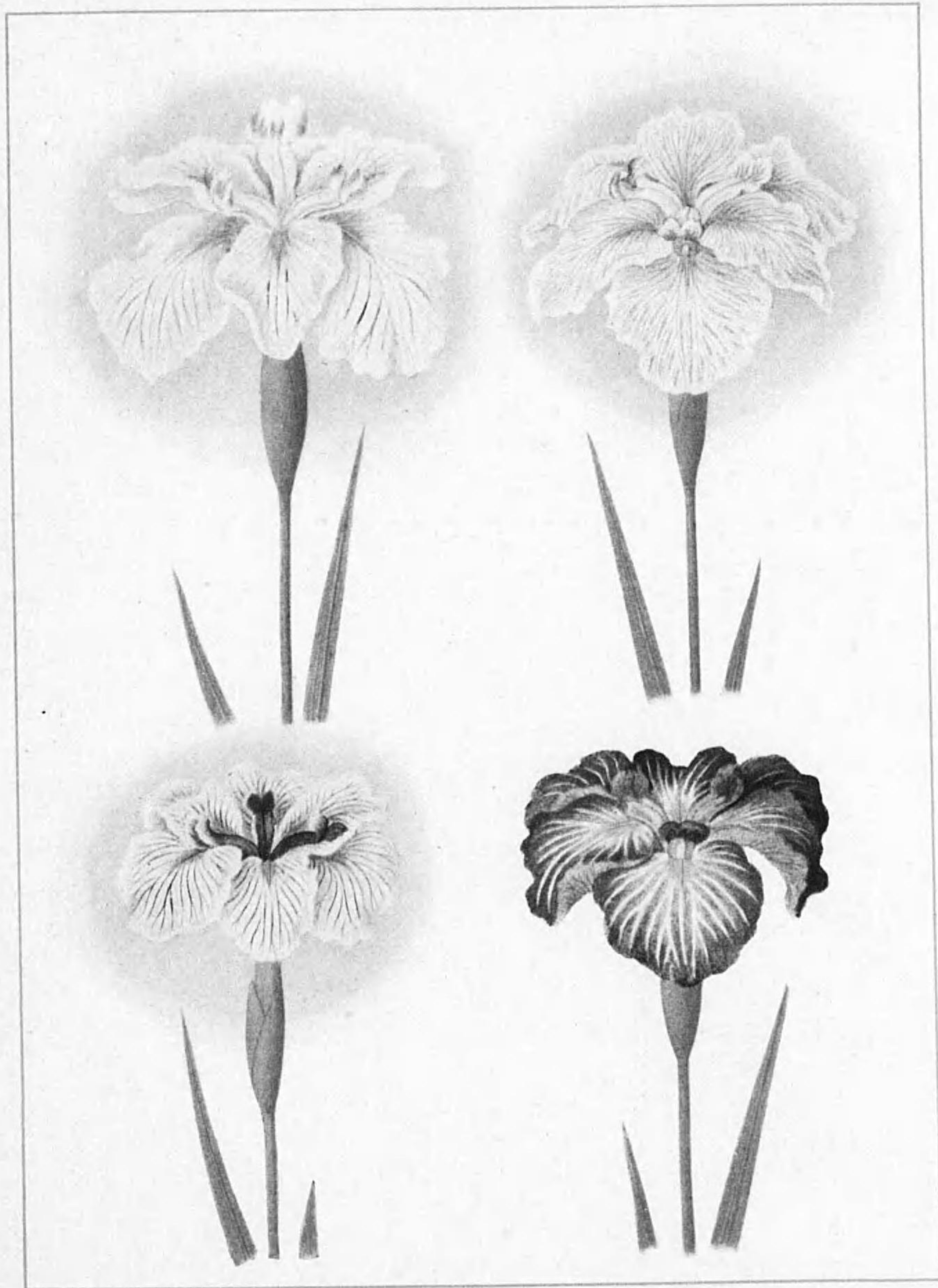
瀧の葉紅 (下左) 錦花 (上左) 衣羽裳寛 (下右) 舞の劍 (上右) 版圖一十第  
 Right above *Iris ensata* Thunb. (syn. *Iris Kaempferi* Sieb.) f. *tsurugi-no-mai*.  
 Right below *Iris ensata* Thunb. (syn. *Iris Kaempferi* Sieb.) f. *geishouji*.  
 Left above *Iris ensata* Thunb. (syn. *Iris Kaempferi* Sieb.) f. *hananishiki*.  
 Left below *Iris ensata* Thunb. (syn. *Iris Kaempferi* Sieb.) f. *momiji-no-taki*.





雲黒 (下左) 車葵 (上左) 波浦の賀滋 (下右) 町小七 (上右) 版圖二十第  
 Right above *Iris ensata* Thunb. (syn. *Iris Kaempferi* Sieb.) f. *nanakomachi*.  
 Right below *Iris ensata* Thunb. (syn. *Iris Kaempferi* Sieb.) f. *shigano-uranami*.  
 Left above *Iris ensata* Thunb. (syn. *Iris Kaempferi* Sieb.) f. *aoiguruma*.  
 Left below *Iris ensata* Thunb. (syn. *Iris Kaempferi* Sieb.) f. *kurokumo*.





川泉 (下左) 鶴眞 (上左) 寶七 (下右) 色の水湖 (上右) 圖三十第  
 Right above *Iris ensata* Thunb. (syn. *Iris Kaempferi* Sieb.) f. *kosui-no-iro*.  
 Right below *Iris ensata* Thunb. (syn. *Iris Kaempferi* Sieb.) f. *shippo*.  
 Left above *Iris ensata* Thunb. (syn. *Iris Kaempferi* Sieb.) f. *manazuru*.  
 Left below *Iris ensata* Thunb. (syn. *Iris Kaempferi* Sieb.) f. *izumigawa*.





花瓣五ノ重一二十(左) 花瓣四ノ重一二十(右) 版圖四十第  
Right *Iris ensata* Thunb. (syn. *Iris Kaempferi* Sieb.) f. *jūnihitoe* subf. *quadripetala*.  
Left *Iris ensata* Thunb. (syn. *Iris Kaempferi* Sieb.) f. *jūnihitoe* subf. *pentapetala*.





(大然自) 蓮寶玉 (左) 爪の龍 (中) 玉の龍 (右) 版圖五十一第  
 Right *Iris ensata* Thunb. (syn. *Iris Kaempferi* Sieb.) f. *ryu-no-tama*.  
 Middle *Iris ensata* Thunb. (syn. *Iris Kaempferi* Sieb.) f. *ryu-no-tsume*.  
 Left *Iris ensata* Thunb. (syn. *Iris Kaempferi* Sieb.) f. *gyokuhoren* (nclumbiflora). (nat. size.)



昭和十年五月十五日印刷  
昭和十年五月廿日發行

東京市麴町區丸の内一丁目一番地

東京府

東京市本所區厩橋一丁目廿七番地ノ二

印刷者 井上源之丞

東京市本所區厩橋一丁目廿七番地ノ二

印刷所 凸版印刷株式會社本所分工場



二七 二 (頁) 正  
二三 一三 (行) 誤  
名稱 八・五・七 (誤)  
名勝 七・八・五 (正)



14.5  
76



終